
ハーフ・ファンタジー

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーフ・ファンタジー

【コード】

N3338U

【作者名】

うわの空

【あらすじ】

私の家にやってきた彼は、異世界の人でした。

目が覚めると、見慣れた天井が見えた。私はゆっくり起き上がると、大きく伸びをした。それから、本棚の上に置いている時計で時刻を確認する。…現在、午前9時30分。

「げ!？」

思わず間抜けな声を出す。それからバタバタと洗面所に向けて走り出した。共働きの両親も中学生の妹も、もう家にはいなかった。私は完璧に遅刻だ。寝坊した。

「起こしてくればよかったのに」

ぶつぶつ言いながら、高校の制服に着替える。夏用の制服は、白色のセーラー服に紺色のスカートという組み合わせだ。私は鏡の前で、自分の制服姿をチェックしてから、ため息をついた。

どうせ遅刻するなら、ゆっくりして行こう。

私は朝ご飯を食べるために、のろのろとリビングへ向かった。その時だった。

ドンドン。

玄関のドアをノックする音が響いた。私はドアの方を見て、首をかしげる。この家にはインターホンがついてるのに、なんでノック？

ドンドン。

…しっこい。勧誘か何かかもしれない。無視してしまおうか。

ドンドン。

…しっこい。

私はドアにチェーンをかけると、そつとドアを開けた。

そこに立っていたのは、見知らぬ男の子だった。年齢は私と同一年くらい…15歳くらいに見える。だけどその男の子の服のセンスは奇抜だった。黄緑色の服に、茶色のブーツ。なんていうか、なにかのRPGのキャラクターのような…。

「…どちらさまですか」

私がさも不審そうな声で尋ねると、男の子は困ったように言った。「道に迷ってしまつて。リオル村に行くにはどっちに行けばいい？」なんだそのリオル村って。近所に、そんな地名はないはずだ。聞いたこともない単語に私は混乱した。この子はいったい何者なんだろうか。

「すみません、分かりません」

そう言うつと彼は、落胆した。それから

「それじゃ、ここはどこなんだ？」

と訊いてきた。というか、独り言のようにぶつぶつ言っている。

私が出自分の家の住所を告げると、彼は眼を丸くした。

「…聞いたことのない地名だ」

私だつて君みたいなのが好きな人は、コスプレの会場でしか見たことないよと突っ込みたかつた。彼はどういふことなんだと、ぶつぶつ呟いている。私はそんな彼を見ながら、悩んでいた。この、よく分からない人をどうすればいいんだろう。

「とりあえず、市役所とかに行つてみたらいいんじゃないですか。

多分その…ナントカ村のこと、調べてくれますよ」

「シヤクシヨ？」

どうも、市役所のことを知らないらしい。困つたなあ。

「その、シヤクシヨにはどう行けばいいんだ？」

彼に訊かれたが、私の家から市役所までは少し距離がある。この人は土地勘が全くなさそうだし、口で説明するのも難しそうだ。

…私は今から通学のために駅へ行く。方向は一緒だし、ちょうどいいか。

「途中までなら、案内しますよ」

私はドアのチェーンを解除した。そして、朝ご飯を諦めた。

私の制服姿を見て、彼は驚いた顔をした。何をそんなに驚いているんだろう。私にとっては、彼のファッションセンスの方がよっぽど不思議だった。

「…その鞆の中に、武器が入っているのか？」

「は？」

私は自分の鞆を見下ろした。中に入ってるのはもちろん、勉強道具くらいだ。武器なんてものは一切入ってない。そう言おうとした私は彼の背中を見て、ぎょっとした。

彼は背中に、鞘に入ったでっかい剣を斜めがけしていた。

「ちよっ…思いつきり銃刀法違反ですよ!!」

私が剣を指さして言うと、彼は不思議そうな顔をした。

「これがないと、モンスターと戦えない。常識だろう。むしろ君が丸腰だということの方が、信じられない」

この人の常識はどうなってるの？私は首をかしげながら、彼の隣を歩いた。

普段は駅まで自転車に乗って行くんだけど、今日は彼がいるから自転車に乗れない。二人乗りをするつもりはなかったので、私は自転車を押しながら彼と一緒に歩いた。自転車は駅まで持っていったおかないと、帰宅するときに不便だ。

彼は自転車を、不思議な生き物でも見るかのようにじろじろ観察

した。そんな彼を私はじろじろと観察した。彼は本当に不思議な生き物だった。

「…どうやってここまで来たんですか？」

自転車から目を離さない彼に、私は話しかけた。どうやって道に迷ったんだろうこの人は。その…ナントカ村から。

「それが、モンスターと戦闘しているときに」

そこまで聞いただけで、私は吹いてしまった。モンスターと戦闘ってそんな、ゲームじゃあるまいし。だけど彼は真剣な表情で続けた。

「敵のモンスターに術をかけられてしまつて…。戦闘離脱の術だった。戦闘から離脱した俺は、気付いたらここにいたんだ」

彼はあたりをきよろきよろと見渡しながら言った。…今、私はきつとてつもなく間抜けな顔をしているだろう。

モンスター？戦闘離脱？なにそれ。

彼の話は筋が通つてるのか何なのか、いまいちよく分からない。そもそも私は、RPGのゲームをしたことがなかった。

とりあえず私は、自分の常識を言つてみることにする。

「あなたがいたのは、地球だよね？」

すると今度は彼が、ぼかんと口を開けて私の方を見た。

「…チキユウ？」

「この星のこと」

「ゼルト星じゃないのか？ここは」

…私も彼も、顔が真っ青になつたと思う。完璧に、話がかみ合つてない。

この人は、地球人ですらないってこと？

彼の話进行を要約すると。彼は、ゼルト星というところに住んでいた。そして旅をしていた。そこにはモンスターがいて、モンスターと戦

闘するのは当たり前だった。そしてモンスターとの戦闘中に戦闘離脱の術をかけられ、気付いたら地球に来ていた、と。

思いつきり広大な嘘をついてるのか、それとも真実なのか。私は彼のことを信用していなかった。けれど何故か、彼の話が嘘だとも思えなかった。

「ゼルト星では、俺は勇者だったんだ」

彼が困ったように、だが誇らしげに言った。

「はあ」

「それで、仲間たちと旅をしていたんだ。…今頃、仲間はどうして
いるだろうか」

「さあ」

としか言いようがない。

「…武器も持っていないということはお前は魔導師か？」

まさか。私は笑った。

「地球はね、平和なんだよ。モンスターもいなければ勇者も魔導師
？もないの」

「そうなのか…」

彼は不思議そうだった。

「…魔導師って、魔法を使える人のこと？」

そういうことに疎い私は、彼に訊いてみた。

「ああ。旅をしているパーティーには、たいてい一人は魔導師が
いる。もちろん、俺の仲間にも魔導師がいた。…一応俺も、基本の術
くらいは使えるんだが」

「へえ、どんなの？」

私が訊くと、彼は道端に落ちていたペットボトルのゴミに、手の
ひらを向けた。そして

「ホムラー!!」

彼がそう叫ぶと、ペットボトルがポツと音をたてて燃えた。

私は、燃えているペットボトルを見たまま凝り固まった。何の物品だ今の。

彼は自分の手のひらを見ながら、「この世界でも術は使えるのだな」と呟いている。

「い、今のどうやったの?」

私はあたりをきよろきよろと見回しながら言った。幸い誰にも見られていない。

「手のひらを対象に向けて、炎をイメージしながら術を唱える。それだけだ」

彼は至極簡単そうに言ったが、私の知ってる世界ではそんなことしたって魔法は使えない。

「お前も多分できるはずだ」

「ええ!?!」

「魔導師のような力を、お前から感じる。もしかしたら魔導師の資質があるのかもしれない」

「そんな馬鹿な。ここは地球だよ?」

私は笑った。その時だった。

建物の影から、熊のような生き物が出てきた。

熊のような、というのは、その生き物は厳密には熊じゃなかったから。全体的に熊に似ているけど、恐ろしく長い爪と牙を持っている。それに付け加えて、ものすごく凶暴そうなその顔。もしもこれが熊だとしても、私はこんな熊を見たことがなかった。

「いるじゃないか、モンスターが!!」

彼が剣を引き抜きながら叫ぶ。だけど私の頭は完全にその思考を止めていた。私の知ってる町はずなのに、あり得ないことが起きている。

彼は剣を構えると、熊のような生き物に向かって勢いよく走っていった。けれど彼の初撃は、あっさりと避けられた。図体のでかい熊は、思った以上に素早かったのだ。熊は彼の攻撃を避けると、私に向かって突進してきた。

「うっうわあ!!」

思わず、両手を前に出した。それを見て、彼が叫ぶ。

「唱える!! 『ホムラ』だ!!」

「ほ、ホムラ!!!」

ほとんど反射的に言っただけだった。が、

熱を持った空気が、チリツと音を立てた。そして

「グオオオオオオオオオオオオ!!!」

熊のようなモンスターが、私の目の前で、燃えた。

「え…?」

呆気にとられてその様子を見てみると、彼がこちらに向かって走ってきた。ひるんでいる熊に剣を振り下ろす。一撃で、熊は倒れた。茫然としている私に、剣を鞘に収めながら彼は言った。

「使えるじゃないか、術」

そう、確かに、私の術でこの熊は燃えたのだ。

「…どうということなの? だってここは私の住んでる町だよ? 何の変哲もない…」

私は混乱しながらあたりを見渡した。確かに私の知っている風景のはずだった。だけど。

「さっきから思っていたが、この町には人がいないな」

彼に言われて気付いた。そういえばさっきから、誰にも会って

ない。車すら通っていなかった。彼はあたりを見回してから、倒れている熊のモンスターを指さした。

「こいつは、俺の世界に現れるモンスターだ。だけどお前が住んでる世界には、…つまりここにはモンスターは出ないと言っていたな」
私は頷いた。頷くことしかできなかった。

「だが、出てきた。お前の知らない、出てくるはずのない、モンスターがな」

彼はそう言うと、私の顔をまっすぐ見た。

「…ここは、お前の知ってる世界か？」

私は答えられなかった。それを見た彼がため息をつく。

「つまり…」

彼が言わんとしていることを、私もぼんやりと理解していた。認めたくないけれど。

「つまり。俺もお前も、自分の世界ではないどこかへ飛ばされてきたということだ」

彼はきっぱりと、そう言った。

私と彼は黙り込んだ。その沈黙を破ったのは

ピロリロリン

私の鞆の中から鳴った、間抜けな電子音だった。

「え…メール？」

私は鞆から携帯を取り出して、開いた。差出人のアドレスには、

見覚えがない。

そのメールの本文はたったの1行。

『ハーフ・ファンタジーへようこそ!』

添付ファイルを開くと、地図が出てきた。

…見た事のある地形だけど、ところどころに知らない森や洞窟がある。

「アウネスの森。ララギアの洞窟。…俺の知っている場所だ」

地図を隣から覗き込んでいた彼はそう言った。私は彼の方を見る。おそらく、真つ青な顔で。彼は地図を見ながら、冷静な口調で言った。

「お前の住んでた世界と、俺の住んでた世界が、半分ずつ混ざってるみたいだな」

私は頷いた。少なくともここは、私の知っている世界ではない。

10

「…多分、元の世界に戻る方法はある」

彼はそう言つと、「お前も来るだろ?」と私に向かって問いかけた。

「え?どこに?」

「どこっていうか、旅に」

「旅つて…行くあてはあるの?」

私が尋ねると彼は頷き、

「…」

地図上の、黒く点滅している部分を彼が指さした。

「多分ここに、魔王がいる。俺の知ってる世界と同じなら、な」

「…どうするの」

「戦う」

きつぱりと、彼は言った。

「なんで」

「多分それが、この世界から脱出する方法だから」

彼はそう言うと、地図から顔を上げた。

「俺の世界が半分混ざってるなら、すべての元凶は魔王にある。だから、魔王を倒したら元の世界に戻れるんじゃないかな」

「…そっか」

あなたはともかく、私は普通の女子高生なんです。なのになんでこんな目に？

私が呆けた返事をしているのにも構わず、彼は私の自転車を指さした。

「それ、乗り物か？」

「…そうだけど」

「歩くより早いのか？」

「…そうだけど」

「じゃ、それに乗って旅しよう」

「ええ！？」

考えてもみなかった提案に、思わず大声を出す。彼は訝しげに、私の顔を見た。

「なにか問題があるか？俺は早く元の世界に戻りたいんだ。お前もだろ？」

「…うん」

「だったら、少しでも早い移動手段を使った方がいいと思うんだが」
「…そうですね」

私は薄ら笑いを浮かべたまま、答えた。

こうして、なんでか魔法が使えるようになった私は、自称勇者の彼と、旅をすることになってしまった。

ママチャリ、二人乗りで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3338u/>

ハーフ・ファンタジー

2011年6月24日23時36分発行